

を物語るかのように、常陸は天に最も近い国であると古代人に信じられ、また常陸では天人の物語が『常陸国風土記』に現われており、今なお3箇所も高天原の伝承地がある。さらに古代日本人の

空間像を要約すると、X・Y・Z軸が混同している場合もあるが、いつも1本の主軸を求めているように思われる。

(千葉大学)

筑波研究学園都市への長距離・長時間通勤

小野 美代子

1兆数百億円を投じて造られた筑波研究学園都市——首都東京の東北50~60kmの位置に、山の手線内側をすっぽりはめ込めるほどの広さの人工都市——の南からの入口に通産省工業技術院筑波センターが、そしてその一隅に地質調査所——私の職場があります。

1882年(明治15年)創立以来、地質及び地下資源に関する唯一の国立研究機関として存続し、今年で100周年を迎えました。

現在の地質調査所の主要課題は、

- 1) 国土及び周辺海域の地球科学的実態の解明
- 2) エネルギー・鉱物資源の探査・評価、
- 3) 国土の環境保全、自然災害の予知・防止、

で、私の属する海洋地質部は、昭和49年に発足した非常に若い部で、上記3課題のうち、アンダーライン部分を担当しています。この研究分野にあって、研究推進の基盤となる国内外の研究情報の蒐集等に関する業務が、私の携わる仕事の主なものです。

現在学園都市には、文教・理工・生物・建設・共同利用各系の国立研究機関と、特殊法人・公益法人の機関を含め約50の機関が集まっています。これらの機関に働く人々の大半は、家族ともども都市内の宿舎に住み、恵まれた自然環境、職住近接の利点とを生かし、概して快適な生活を送っています。が、残りのかかりの人々は、諸事情で単身赴任あるいは長距離通勤をやむなくさせられています。私もその1人。世田谷のはずれから往復総通勤距離180kmを5時間余りかけて通う毎日です。私は職場では、東京からの女性通勤者は私1人ですが、同じ工業技術院内の他の職場、他省庁の研究所には仲間も沢山いて、常磐線の車内で、

ホームで、階段で、互いにぼやき、慰め励まし合ったりしています。

4:00起床—入浴・冷水摩擦(健康法の一つ)—
4:40出発—新玉川線・山の手線・常磐線・バス—
7:20 職場到着, 17:00 庁舎出発—上記を逆に迎って—20:00帰宅。これが私の1日です。

54年11月筑波移転以来、それまでとは180度転換してしまった生活様式を続けて2年、私の得たものは、「人間とは元来コントロール次第でどうにでもなるもの」との感慨です。際限なく墮落していたのが、私の学生時代であったような気がします。豊富な自由時間を自分で管理できず、地理の勉強はそっちのけ、どういうわけか専門外のものに熱中し、読みたい本、観たいものを追っていた、いわば落第生でした。職場に入って2年で結婚、育児と仕事の両立は、私の代役を立派に果たしてくれた健康な母親と夫の協力で支えられて初めて成り立ってきました。2年前の移転時には、下の娘も小学校5年生に成長していたので、病気等への気配りはぐっと減った反面、家を離れている距離・時間の長さ故、要らぬ心労が加わり最初の1年は確かに疲れました。がむしゃらに突進して来た第1段階は終り、今は“5時間”の効率よい使い方を再考する段階に来たところです。

筑波移転は、自分の生き方、考え方を変える確かによいチャンスでした。長距離・長時間通勤という生活形式が精神構造をも変えたといったところでしょうか。転機としては遅すぎたかも知れませんが、これからも自分なりに頑張っていくつもりです。

(4回生 地質調査所)